

★ 特集：建築意匠における煉瓦の魅力と可能性 ★

れんが倉庫の活用及び 真白なれんが外壁の美術館 2 題

日本れんが協会 技術顧問
金子 祐正

110 年を超えるれんが造の建物本来の姿を活用した弘前れんが倉庫美術館と真白なれんが外壁の青森県立美術館を紹介する。

1. 弘前れんが倉庫美術館

(1) れんが倉庫改修で美術館建設

弘前の福島藤助は、明治 29 年に福島酒造会社を設立し醸造工場(日本酒)を弘前・茂森町に建てた。1907 (明治 40) 年事業拡大のために弘前の中心街の吉野町(現在地)に新たに工場と倉庫を兼ねたれんが倉庫を建設した。戦時中は米不足のためにリンゴ酒を造ったが、時代の趨勢とともに昭和 40 年酒造りを中止した。れんが倉庫は、昭和 53 年から平成 9 年まで政府米保管倉庫として使ったが、平成 27 年に土地と建物ともに弘前市の所有になった。市は「れんが倉庫の魅力を最大限に活用し文化創造の拠点を作る」との方針を立てた結果、れんが倉庫を改修して美術館を創設することとなった。れんが倉庫の改修設計を担当した建築家・田根剛は、既存のれんが壁を可能な限り残し、屋根は「シールド・ゴールド」と称するチタン製とし、れんが倉庫全体の美観を持たせて 2020 (令和 2)年に開館した。

れんが倉庫の創設者福島が手掛けた建造物の多くはれんが造りで専用のれんが工場と砕石工場を持っていた。明治 40 年代はまだコンクリートが普及しておらずれんが造りは頑丈で最良のものであったが、木造に比べて大がかりで費用がかかった。しかし福島は「たとえ事業に失敗しても建物は市の将来のために遺産として役立てればよい」と語っていたが、正に福島の予期した通りれんが倉庫は市の所有となり美術館として活用された。



▲弘前れんが倉庫美術館の全景

(2) 弘前積みれんが工法

敷地内にれんが倉庫改修の美術館とカフェショップがある、美術館は 2 階建れんが造、延べ床面積 3090 m²、施工は大林組。建物の布基礎は既存の無筋コンクリートに新たに鉄筋コンクリートで挟み込んだ、れんが壁はイギリス積みである。

エントランスはドーム形アーチで新旧のれんがを互い違いに組み合わせたが、新旧れんがの違和感はいれんがを若干ズラシながら積むことで解消させた。このズラした積み方を「弘前積みれんが工法」と称して(株)高山煉瓦建築デザイン(東京・青山)が施工した。またロビーは既存と新規のれんが壁が混在し、2 階ライブラリー・オフィスのれんが壁には漆喰が使われ、展示室のれんが壁はコールタル(毒性無し)が塗られてそれぞれの部屋の個性を醸し出している。既存のれんがの表情をできる限り活かすためにれんがの汚れや白華などは軽く高压洗浄したり手で磨いたりしてあまり手を加え過ぎないようにした。れんがは既存、新規ともに米澤煉瓦(北海道江別市野幌)製。また発色チタンを用いた屋根